

夢と老婦人（窓・論説委員室から）

見知らぬ方から、今年の初め手紙をいただいた。「持っていた土地が値上がりしたのは、意図せざるごと。社会にお返ししたいのです」

八十八歳を区切りに土地を処分した。手元には生活費だけあればいい。残りを「寝たきり」をなくす仕事に使っていただきたいのだが、という。とっさに頭に浮かんだのが千葉忠夫さんだった。

二十六年前、二十六歳の春、リュック一つでデンマークへ渡った。養豚農家に住み込み、働きながら言葉を身につけ、大学で福祉を学び、現場で経験を重ねた。五十歳に近づいた時、千葉さんは、デンマークと日本の福祉の懸け橋になる仕事を始める時が来た、と心に決めた。

廃校になった小学校を買い取り、少しずつ改造した。そこは「寝たきり老人」のいない国、デンマークを学びにくる日本人の勉強の拠点の一つになった。

千葉さんの夢はさらにふくらんだ。デンマーク政府の認可を受けよう。そうすれば、運営費の八五%が公的に保障される。日本から勉強にくる人たちの負担を減らせる。デンマーク人も日本語や日本文化を学びたがっている。ここを日本とデンマークの文化交流学院にしよう。

文化省も応援してくれることになった。だが、開校するには生徒と先生が寝食をともにする寮の建設費など、少なく見積もっても五千万円かかる。日本の代表的な企業白社に寄付依頼の手紙を書いたが、応答なし。千葉さんは、落胆した。

私は手紙の人に電話して千葉さんの夢を伝えてみた。その人は、デンマークに一千万円を送った。匿名だけが条件だった。学院は、開校に向かって、一歩動き始めた。

「お礼などとてもない」と固辞する、その人を無理に訪ねた千葉さんから感動しきった声で電話があった。

「尋ねあてた家は、実に質素でした。そこから上品な老婦人が出てこられました。それが、あの方でした」

千葉さんの夢に物心で参加しようと思う方は、〇三―三二八八―〇〇六八へ。

〈雪〉